

# 川崎フロンターレ

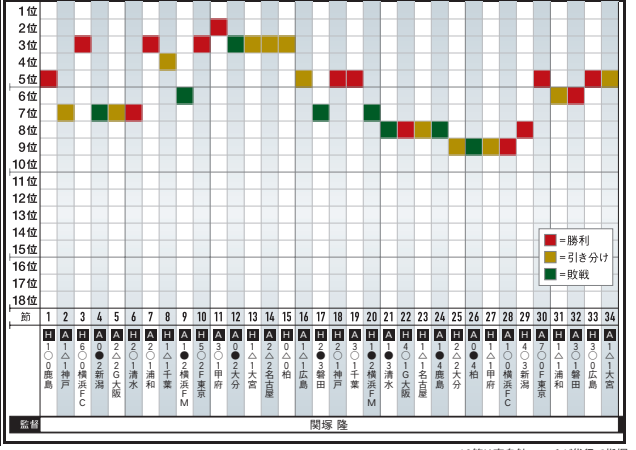
## KAWASAKI Frontale



### 2007年間順位

# 5

勝ち点54  
14勝12分け8敗  
66得点・48失点・得失点差18  
ホーム 勝ち点31 8勝7分け2敗 37得点・20失点  
アウェイ 勝ち点23 6勝5分け6敗 29得点・28失点

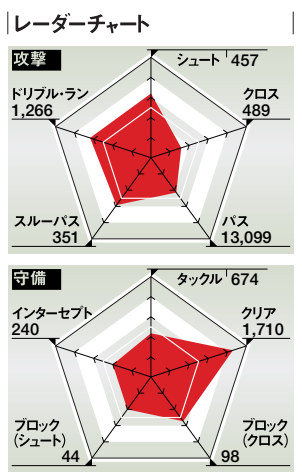


13節は高島勉コーチが代行で指揮

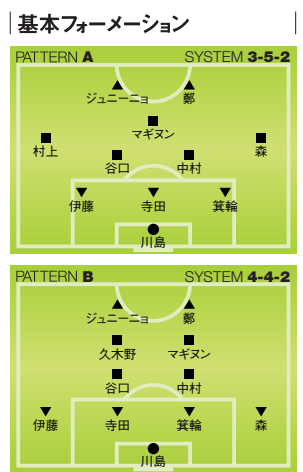
## やや物足りない結果も 来季を思えば糧になる年

タイトル獲得を目指した今季、首位の鹿島に勝ち点で18差をつけられてのリーグ5位は、やや物足りない結果だが、チームの幅を広げたシーズンとなった。リーグ最多得点を挙げた昨季のカウンタースタイルが研究され、思うように先制点を奪えず、逆に攻めさせられ、またはボールを持たされて、カウンターを仕掛けられる場面が目立った。12節大分戦から6試合連続勝ちなし、20節横浜FM戦から8試合で1勝など、なかなかリズムを取り戻せずに優勝戦線から大きく後退した。

だが、ナビスコカップ準々決勝で変則的4-4-2を採用して結果を出すと、その後のリーグ戦で負けなし。最終ラインのスペースをケアして守備バランスを保ったことで、攻撃へ切り替えて前へ出る勢いを取り戻した。マギヌンが負傷した代わりに大橋正博、養父雄仁がある程度の活躍を見せ、左サイドではFWの黒津勝や久木野聡が可能性を示すなど、苦しんだ中でも多くのオプションとプレーの選択肢を得たはずである。



シュート数などで平均値は上回ったものの、昨年と比べると爆発力は影を潜めた。相手に守られた際に、思い切りの良さを出したかたところか。守備ではクリア数が圧倒的に多い。強力3バックを中心に相手の攻撃をね返した証拠だろう



従来の3-5-2システムだけでなく、4-4-2などへの移行もスムーズになり、チームとして幅が広がった。久木野新勢力も登場。左サイドやFWでメンバーが入れ替わる試合があったが、バックを中心に相手の攻撃をね返した

### チーム内ランキング

ゴール	決定率	パス	成功率	クロス	成功率
ジュニーニョ	22 17.6%	中村 憲剛	1761 78.0%	森 勇介	106 22.6%
那 大世	12 25.5%	伊藤 宏樹	1246 76.7%	ジュニーニョ	73 24.7%
マギヌン	7 15.6%	箕輪 義信	1162 73.8%	中村 憲剛	65 33.8%
		寺田 周平	1035 81.4%	黒津 勝	38 23.7%
		森 勇介	910 80.5%	マギヌン	38 13.2%

ドリブル	成功率	タックル	成功率	空中戦	成功率
ジュニーニョ	237 48.1%	寺田 周平	81 80.2%	那 大世	177 50.8%
森 勇介	109 47.7%	中村 憲剛	79 81.0%	箕輪 義信	173 74.0%
中村 憲剛	75 52.0%	伊藤 宏樹	78 84.6%	伊藤 宏樹	146 69.9%
黒津 勝	75 41.3%	箕輪 義信	67 86.6%	寺田 周平	145 69.7%
マギヌン	52 42.3%	谷口 博之	66 90.9%	マギヌン	114 35.1%

### FIXTURES

GK	①川島 永嗣	②相澤 貴志	③植草 裕樹	④杉山 力裕	DF	②伊藤 宏樹	③佐藤 秀樹	④井川 祐輔	⑤箕輪 義信	⑥寺田 周平	⑦大久保 将人	⑧園田 淳	MF	⑥河村 崇大	⑧フランシスマール	⑨マギヌン	⑭中村 憲剛	⑮原田 拓	⑯落合 正幸	⑰飛弾 暁	⑱森 勇介	⑲養父 雄仁	⑳久木野 聡	㉑鈴木 達矢	㉒村上 和弘	㉓谷口 博之	㉔杉浦 泰平	㉕田坂 拓介	FW	⑦黒津 勝	⑩我部 龍	⑪ジュニーニョ	⑬那 大世	⑭久木野 聡	⑮都倉 賢	⑯西山 貴永	
試	34	0	0	0	33	13	19	30	29	0	0	0	15	4	19	22	7	9	1	30	5	17	0	22	21	0	1	28	18	31	24	11	2	3			
時間	3060	0	0	0	2920	962	456	2681	2548	0	0	0	809	263	1687	2684	187	563	78	2613	342	727	0	1741	2458	0	0	1442	863	2735	1325	332	13	20			
スタ	34	0	0	0	33	10	18	30	28	0	0	0	8	1	19	30	2	6	3	0	4	1	8	8	22	4	16	9	31	16	4	7	2	0			
投入	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	7	0	7	0	2	5	0	0	1	1	1	0	2	2	0	4	9	1	1	1	0	0			
失	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	4	0	0	0	0	0	15	9	19	0	24	3	0	37	13	22	4	1	0	0			
失内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	28	7	14	0	7	2	0	20	4	4	1	0	0	0			
失外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	7	0	5	0	17	0	0	38	7	4	0	0	0	0	0		
セーブ	8	0	0	0	12	5	2	11	6	5	0	0	336	113	717	5761	85	23	26	0	910	180	348	0	705	877	12	381	44	22	131	4	5	1	0		
セ内	98	0	0	0	12	4	3	13	2	2	0	0	6	10	36	65	8	2	3	0	28	6	18	0	34	27	0	20	6	6	18	9	2	0	0	0	
セ外	47	0	0	0	7	2	10	7	2	0	0	0	7	4	10	10	0	0	0	0	106	4	12	0	14	13	0	38	7	4	3	11	3	0	0	0	
フィ	648	0	0	0	6	4	15	15	8	8	0	0	6	12	52	75	0	0	0	0	109	8	12	0	31	28	0	19	68	237	68	237	8	4	0	0	0
ロン	547	0	0	0	7	5	15	15	7	2	0	0	7	12	6	7	0	0	0	0	62	4	12	0	43	13	0	19	4	3	11	3	0	0	0	0	
シュ	101	0	0	0	22	5	18	17	8	8	0	0	27	6	2	2	0	4	15	1	25	7	6	14	66	26	0	19	7	10	10	10	0	0	0	0	0
インタ	32	0	0	0	5	5	8	8	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	62	25	1	0	0	0	0	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7

※青番号の●は途中移籍した選手、□は途中加入した選手  
※試合=出場試合数、時間=出場時間(分)、スタスタ=スタメン回数  
[GK欄] 投入=投入回数、失=失点、失内=失点PA内、失外=失点PA外、セ=セーブ、セ内=セーブPA内、セ外=セーブPA外、フィ=フィード、ロン=フィードロング、シュ=フィードショット、[GK以外] 投入=途中出場回数、ゴ=ゴール、シュ=シュート、パス=パス、ラス=ラストパス、クロ=クロス、スル=スルーパス、ドリ=ドリブル、タックル=タックル、インタ=インターセプト]

## 縦への動きを復活させて再浮上を図る

選手たちが「決めるところで決めない」と口々に話したように、後期に失速した原因は決定率の著しい低下だ。ペナルティエリア内のシュートが多いにも関わらず、得点につながらなかった。カウンターがはまった前期はパスの本数も少なく、効率良く得点を挙げていたことがうかがえる(1試合あたりのパス数:

372本→418本→369本)。だが後期は、チャンスを生かせずに先制点を奪われ、相手に守備を固められたため、横パスの比率が高まりカウンターを發揮できない状況が多かった [DATA 1]。しかし、3-5-2から4-4-2システムに変更した29節新潟戦以降は、30節FC東京戦で大量7得点を挙げるなど、息

を吹き返した。3-5-2に戻しても守備の安定を維持し、先制点を奪われなくなったことで、持ち味であるカウンターを仕掛けられたことが最大の要因。全体のパス方向も前方比率が高まり、ラストパスの比率も前方比率が一気に高まった [DATA 2]。実際、シーズンのラスト8試合では負けがなかった。

### DATA 1 期間別被先制試合数

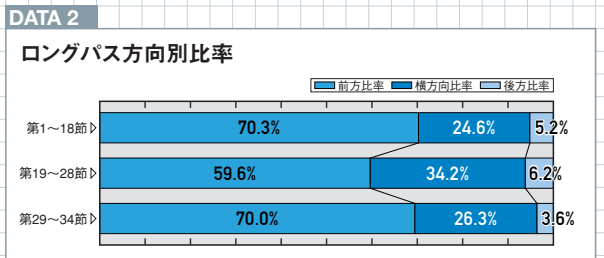
被先制試合数	第1~18節	第19~28節	第29~34節
被先制率	38.9%	80.0%	0.0%
勝敗数	7勝7分4敗	3勝3分4敗	4勝2分0敗

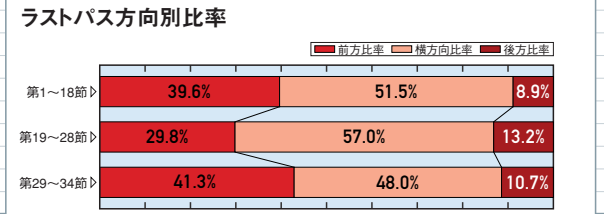
### 期間別シュートスタッツ(1試合あたり)

	第1~18節	第19~28節	第29~34節
ゴール	1.8	1.5	3.2
シュート決定率	13.9%	10.9%	21.6%
シュート	12.8	13.8	14.7
シュートPA内決定率	21.0%	16.2%	31.9%
シュートPA内比率	51.5%	53.6%	53.4%

中断明けの第19~28節の10試合中、被先制試合数は8試合。また、被先制試合数が多かった期間では、シュート数は中断前とほぼ変わらず、また、シュートPA内比率は中断前よりも増加しているが、決定率が大きく減少した。



ロングパス前方比率が70.3%であったものが、第19~28節に59.6%までに減少、また横方向比率が34.2%に上昇。被先制試合数が多かった第19~28節は、前方へのロングパスが出せず、横方向でつないでいた。



被先制試合が多かった第19~28節では、ラストパスの前方比率が減り横や後方への比率が増えたが、第29節以降は前方比率が増加。

## カウンターに対応できず、バランスを崩す

今季后期の失点の多さに苦しんだ。勝てなかった時期は特に、被シュート決定率が他の時期より群を抜いて高く、相手に決定機をつくらせてしまっていることが分かる [DATA 1]。タックルラインを見ても分かるように、FWとMFのスペースが大きく開き、チーム全体のバランスが崩れた。タックルラインは決し

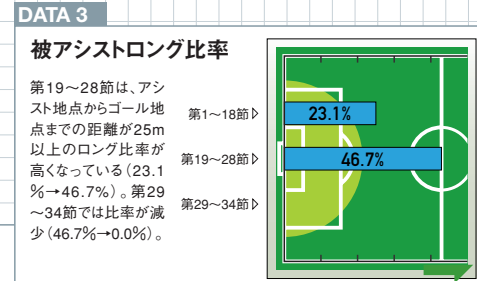
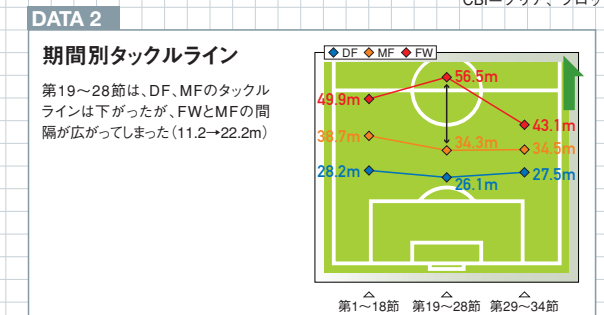
て高くないが、「押し込まれるのは慣れている」と森勇介が言うように、それは問題点ではない。実際、結果が出たリーグ終盤は、低い位置でもコンパクトに保っていた [DATA 2]。強力守備陣を中心に、中断前のCBIはリーグトップの数値をマークしたが、中断明けは13位に後退。特にブロック数

が著しく低下した(4位→18位)。原因は相手にカウンターを許したことなど、最終ラインのスペースを突かれる場面が増えたからだろう [DATA 3]。3バックより外へのボールに対しては、どうしても後手を踏み、クロスやドリブルを許した。だが、4バックへのシステム変更でそれが減り、再び失点数が減少した。

### DATA 1 期間別被シュートスタッツ(1試合あたり)

	第1~18節	第19~28節	第29~34節
失点	1.3	1.9	1.0
被シュート決定率	12.0%	18.1%	9.0%
被シュート	10.6	10.5	11.2
被シュートPA内決定率	20.4%	31.4%	13.3%
被シュートPA内比率	51.3%	48.6%	44.8%

中断明けの第19~28節は、被シュート数は変わらなかったものの、決定率は18.1%、また、ペナルティエリア内からの被シュートの割合は、第1~18節よりも、若干下がったにもかかわらず、決定率は上昇(20.4→31.4%)。



第19~28節は、アシスト地点からゴール地点までの距離が25m以上のロング比率が高くなっている(23.1%→46.7%)。第29~34節では比率が減少(46.7%→0.0%)。